東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 28 号（2024）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies*, Vol. 28 (2024)

「ドイツ的とは何か？」
――ある同時代的な現象について

山口裕之

> 「ドイツ的とは何か？」――それに対して私は直接的に答えることはできない。それ以前に、問いそのものに対しての反省的考察が必要となる。この問いは、現にあるそのとおりのものではなく、どうあってほしいかを固有のドイツ的なものとして想定するあの思い上がった定義によって、重荷を負わされているのだ。
>
> アドルノ「ドイツ的とは何かという問いに対して」[1]

今世紀に入ってから、ドイツで一つの注目すべき現象が起きている。小さなことにすぎないのだが、いったんそれに気づくとどうしても目を引く、少し不思議にも見える現象である。「ドイツ的とは何か？（Was ist deutsch?）」というまったく同一の（あるいはほぼ同じ）タイトルをもつ書物・刊行物が、相次いで出版されているのだ。内容の方向性やどのような執筆者であるかには大きなちがいがあるものの、調べることができたものだけでも、14 点ものほぼ同じタイトルの著作物[2]が刊行されるというのは少し異様にも見える。しかもそれらの半数以上は 2015 年以降に集中している。

この現象が特別なことに見えるのは、単に同じタイトルの刊行物が同じ時代に集中的に現れているためだけではない。ドイツでは戦後、「ドイツ的」なものという概念的な括りで何かを語ること、「ドイツ的」なものを問うことそのものが否定される社会的了解が強力に形成されていたからだ。

「ドイツ的とは何か？」という名の書籍が、21 世紀の特定の時期にすでに多数刊行されているということは、いずれにせよ、ある社会的な了解の枠組みが大きく転換しつつあることを示している。それはいつのことなのか、そしてなぜそうなったのか。その問い自体は、比較的表面的な出来事のレベルでの答えにさしあたり行き着くことになるかもしれない。しかし、むしろより重要であるのは、「ドイツ的」なものを問うこと、そしてそれに何らかの回答を与えようとする行為が、この 21 世紀のわれわれの時代においてどのような意味をもつものとなっているか、そこでは社会・文化の内部でどのような力が働いているのかを検証することである。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

1.「ドイツ」という汚名

1995 年からベルリンを拠点にドイツ語圏で活躍するカバレット・デュオ Pigor & Eichhorn の 4 枚目のアルバム Volumen 3 の冒頭に Don’t look と題された曲が収録されている。あなたはどこの出身かとみんな聞きたがるがその質問が大嫌い、という言葉に始まり、歌詞は次のように続いてゆく。

「ヨーロッパだよ」というと、そのあとはいつも同じ、“Oh yes but what country?”
それでいつも「ベルリン」という。するとすぐさま、“Oh Germany!”
親しくしていたのに慇懃になり、飲んでるものの値段が突然高くなる
いちゃいちゃしていたのに conversations になってしまう
――これはドイツ人の妄想症（ジャーマン・パラノイア）か？
いやそうじゃない、いつもみんなこんなふうにヘンによそよそしくなってしまう
“Germany” というと、みんな同盟して（alliiert）見てくる

それに続いて、次のリフレインがドイツ語の混じった英語で歌われる。

Don't look so alliiert at me
Ich geb' es ja zu（確かに認めるよ）I am from Germany
Don't look so alliiert at me
I am from Germany okay, I'm sorry [3]

“alliiert”（同盟して）という言葉が繰り返しドイツ語で挟まれているが（英語では allied)、これは第二次世界大戦における「連合国」（Alliierte）を表す言葉としてもちろん意図されている。みんな結託してそんなふうに、という意味とともに、ドイツを敵として戦い、そして戦後はドイツを断罪する立場にあった連合国の目で自分を見ないでくれということだ。

このアルバムが発売されたのは2000年、そのもとになる舞台公演プログラム “Volumen 3” が演じられたのは、その前年の 1999 年である。政治的諷刺をきかせたカバレットの場で、観客はこの歌と演技を大笑いしながら共有していたということになる[4]。ドイツ人であることのうしろめたさの感覚が、大戦後半世紀以上、再統一後 10 年ほどたつこの時点でもこのように大っぴらに言語化されているということの一つの生き生きとした例証である。ここには、カバレットの観客の多くが一般的に年配の人たちだということも、ある程度かかわっているかもしれない。

ここに見ることができるドイツ的なものに対する自己否定の身振りは、ほんの一つの例にすぎない。ドイツ人による戦後の「ドイツ」否定の傾向は、いくぶん強調されているかもしれないが、ほぼ同じ時代に出版されたあるドイツ文学研究者の言葉のうちにもきわめて明示的に表れ出ている。『ドイツ文学の短い歴史』と題されたコンパクトな書物の第一

章、「ドイツ的」と題されたその章の冒頭で、シュトゥットガルト大学のドイツ文学の教授であったハインツ・シュラッファーは、戦後のドイツにおいて、「ドイツ的」なものを否定する二つの「格率・原則」が存在していたと強調する[5]。「ドイツ的なものは存在しない」、「ドイツ的なものは（仮にそのようなものが存在するとしても）悪でしかない」という、戦後のドイツ人の自己否定的なコンセンサスで要請されている内容そのものは、もちろん、19 世紀初頭以降、「ドイツ的」なものをめぐって大量の言説が生み出されていった事実とまったく合致しない。しかし、ナチズムの途方もない犯罪行為のために戦後になって完全に負の烙印を押されることになったこの「ドイツ的」なものを否定するために、まさに「ドイツ的」なものに関わる場であるはずのドイツ文学研究（Germanistik）を大学で学ぶドイツ人学生は、ドイツの言語・文化・文学に対する特別な愛情があるからこの専攻を選んだのかという推測に対して不機嫌にそれを退ける、と著者のシュラファーは述べている。

この著作が出版されたのは 2002 年、1939 年生まれのハインツ・シュラッファーがシュトゥットガルト大学を定年退職する 2 年前、63 歳になる年のことである。ここで言及した冒頭の章は、激しい論争と批判を引き起こしたこの著作の主張そのものに直接関わっているわけではないが、この出発点となる記述に対してもおそらく多くの異論がありうるだろう。この本が出版された 21 世紀初頭のドイツの大学で、ドイツ文学を学ぶドイツ人学生が、ほんとうにこの著者が述べるようにみなドイツ的なものへの大っぴらな愛情告白をありえないものと考えていたのかどうか[6] ――このことを検証するためには、幅広い世代にまたがる広範な証言が必要になるだろうが、いずれにせよ、2000 年前後の時代にもなお、戦後のドイツにゆきわたることになった「ドイツ的」なものの否定という社会的了解が強力に存在していたということはいえるだろう。

2. 総体としての「ドイツ的」なものの否定

そのように極度なまでに否定されていた「ドイツ的」なものとはいったい何か。まさにそれこそが、21 世紀になって次々と生み出されてきた書物がそれぞれの立脚点からこぞって答えようとしていたことでもある。しかし、そのようなごく近年の例に向かう以前に、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、この問いに取り組もうとする数多くの著作が、その時点でのドイツの政治状況に応じて書かれ、そのようにして、「ドイツ的」なものをめぐる言説の系譜が作り上げられてきた歴史がある。

「ドイツ的」なものという「国民意識」[7] を形成する主体であるはずの「国民」も、その政治的統合体も、このナショナリズム的意識が明確に発動することになるナポレオン戦争の時点では、ほぼ存在しないに等しいようなものでしかなかった。帝国としての統合的機能がとうに失われた時点の 15 世紀末になって「ドイツ国民の」という言葉が加えられていた「神聖ローマ帝国」、つまりかろうじて名前の上で存続していた「ドイツ」というかりそめのまとまりは、ナポレオンの侵攻を受けて 1806 年に消滅する。それによって、それまではそれぞれの領邦に対する所属意識の中で生きてきた人々が、「フランス」という共通の外部によって、「ドイツ」というアイデンティティ的な輪郭を意識するようになり、

民族・言語をともにする一つの共同体を目指す政治的・思想的・文化的言説が生まれてゆく。「ドイツ的」なものを求める志向は、「ドイツ」というものが存在しないところから生まれているということは、逆説的であるようにも見えるが、むしろ、(ウィーン会議後に成立した国家連合としての「ドイツ連邦」は別として)政治的統合体としての「ドイツ」が 1871 年の統一にいたるまで存在しなかったということによってこそ、ドイツ的なものを求める問いが力を得ていたともいえる。「ドイツ的とは何か」を問うことそのものが「ドイツ的」であるという指摘は[8]、そのことにも関わっていると言えるだろう。

何が「ドイツ的」特質として語られてきたかを包括的に描き出そうとすると、さまざまな思想家・作家・芸術家の言説が時系列的に提示され、また複数の文化領域にまたがってとりあげられたものというかたちをとることになる[9]。トーマス・マンがドイツの第二次世界大戦敗戦直後に亡命先のアメリカで行った講演「ドイツとドイツ人」では、コスモポリタニズムと田舎者的な気質というドイツ人の両極性、デーモン的なもの、それと結びついた「音楽」、それらがすべて体現されているルターとプロテスタンティズム、ドイツにおける「自由」の独自の概念、「内面性(Innerlichkeit)」、それらを体現する「ドイツ・ロマン派」といったさまざまな概念や事象が提示されてゆく。この講演では、こういったドイツ的特質につながるものは、ナチズムの恐ろしい犯罪行為を伴いながらドイツが破局に至った 1945 年という時点で、いわば同時代に存在していたものが一挙に並列的に語られているような外観を与える。しかし、このトーマス・マンの講演で述べられていることも同じように、歴史を通じて積み重ねられていった観念の複合体である。

ドイツ的なものを問うそのような言説は、とりわけフランスをライバルとする戦争とその帰結(ナポレオンの侵攻と神聖ローマ帝国の消滅、普仏戦争とドイツ統一、第一次世界大戦、ナチズムの支配と第二次世界大戦)――つまり「自己」のアイデンティティを明確に浮かび上がらせるための「他者」が最も明確に対置される装置――を顕著なステップとして、次々と生み出され、積み重ねられていった。それらの観念は、形成されてゆくにしたがって、単なる個々の特質の集合体というよりも、大きな概念のイメージへと収束してゆく。それをおそらく最も集約的に表しているのが、ドイツ的「Wesen(本質)」という言葉であり、「Deutschtum(ドイツ性)」という言葉だろう。

「本質」に至ろうとする性向、現象的なもの・外的なものそのものに価値を認めず、それを生じさせている最も根源的なものに至ろうとする姿勢は、きわめて「ドイツ的」な特質としてしばしば語られている。それが最も顕著に現れているのは哲学の領域(とりわけ初期観念論からハイデガーに至るアカデミズムの哲学)であり、それは 19 世紀のドイツ教養市民層の価値と重なり合うきわめてポジティブな概念であったはずだ。しかし、この言葉はナチズムの時代にいわば強烈に汚染されてしまうことになる。例えば、ナチズムにおける文化政策の中心人物であったアルフレート・ローゼンベルクの著書『二十世紀の神話』(1930 年)では、第二部の表題が「ゲルマン芸術の本質」とされているだけでなく、この書物全体を通じて、Wesen(ないしはそれと関わる語)が 300 回以上出現する[10]。

Wesen がそれでも比較的一般的な語彙であるのに対して、Deutschtum という言葉は、第二次世界大戦後のドイツでは、しばしば強烈な否定的反応を引き起こす語となっている。ある概念に特徴的な性質等を総体・集合として表す “-tum” という接尾辞は、いまで

もごく普通に用いられているものではあるが（Christentum キリスト教、Judentum ユダヤ教、Bürgertum 市民層）、deutsch（ドイツ的、German）という語と結びついて「ドイツ的」なものの総体を表す言葉となるとき、この語は、ナチズムにおいてドイツ的特質が他の文化・社会に対して完全な優越性を有するものとして位置づけられようとする言説を呼び起こすことになり[11]、特定の世代の人々、「ドイツ的」特質の否定というコンセンサスのうちに生きるドイツ人には完全に拒絶されるものとなった。Wesen や Deutschtum という語に共通していえるのは、さまざまなドイツ的特質として言及される個別の観念が、ある総体として優越的な価値をもつかのようにナチズムにおいて語られた記憶を引き継いでいることだろう。そのために、このような意味で「ドイツ的」なものを求める問いが、戦後のドイツにおいて強く否定されることになったといえる。

3. 戦後の社会思潮の転換

第二次世界大戦後、ナチズムによるユダヤ人の組織的な大量虐殺が連合国の情報によって次々と明らかにされてゆく。ある程度予感していたはずの多くのドイツ人市民も、その事実にひたすら衝撃を受け、その巨大な悪を否定する立場を取るしかない。しかし、連合国の主導による（形式的な実施にとどまることも多かった）「非ナチ化」を経て、アデナウアー政権（CDU）のもと戦後の経済復興に邁進するドイツでは、ドイツ人としてナチズムの罪と向き合うのではなく、ドイツ人によるこのおぞましい行為を自分自身と切り離してとらえようとするある種の責任逃れの言説が広くみられるようになる。それに対して、第二次世界大戦の時代を生きていた親の世代に対して仮借ない批判を向けたのが「68 年世代」である。ナチズムの過去に対して目をそらすことなく対峙し、ナチズムにつながる思考や言説に対して完全に否定的な立場をとるリベラル左派のコンセンサスは、SPD の政権下（シュミット首相）にあった 1970 年代に形成され、教育の場でもそれが徹底されることによって、このコンセンサスは公的な場で基本的に引き継がれてゆくことになる[12]。「ドイツ的」なものを問うことは、ドイツのナショナリズム的意識に必然的につながるものであり、ナチズムにおいて自民族の優越性を強調する言葉と思想のうちに結果的に流れ込んでしまうことになる。そのため、ドイツ的なものをめぐる言説の歴史は、ドイツにおいては非常に語りにくいものになっていたといえる。

1982 年に保守派の CDU（コール首相）へと政権が交代するが、そのことはこのような社会の趨勢にある変化が生じていたことを象徴的に示すものでもある。この時期、1980 年代の後半に展開した「歴史家論争」は、ドイツの過去とどのように対峙するかをめぐる言説にとって、きわめて重要な位置を占めている。ナチスのおこなった戦争を大きな歴史の流れの中で相対化し、それを通じて擁護する歴史家エルンスト・ノルテの論文に対して、1986 年 7 月にユルゲン・ハーバーマスが『ツァイト』紙に批判的論考を掲載したことにより、この論争は始まる。「ナチズムを無害化する修正主義というテーマ」[13] に対するハーバーマスの陣営からの批判は、この論争の中で全体としては優勢に立っていたにせよ、そして、リベラル左派のコンセンサスは依然として保持されていたにせよ、三島憲一によれば、「修

正主義者たちの議論の方が、水面下では、つまりメディアには現れない、日常の意識の中では支持が多かった」[14]。さらにいえば、「歴史家論争の皮肉な意義は、公共の議論ではじめてナチスの戦争の擁護がなされるようになったことでもある。」[15]

こういった議論をいったん終結させ、有無をいわせず決定的な変化を生じさせることになったのが、1989 年の壁の開放と翌年のドイツ再統一という未曾有の出来事だった。東ドイツでの民主化を求める運動の中での「われわれこそが国民だ（Wir sind das Volk）」というスローガンが、「われわれは一つの民族だ（Wir sind ein Volk）」に入れ替わってゆき、この「一つの民族」という同胞意識が、壁の開放からドイツ統一に向けての大きなうねりの中で社会を包み込んでゆく[16]。しかし、統一後それほど時をおかずして、西と東の双方のドイツ人のうちに、現実に対する失望や不満が広がる。それとともに、それまでいわば抑圧されていたネイションの意識がいったん浮上したのちには、その不満の矛先をドイツ国内の外国人に向ける排斥的・攻撃的なネオナチの台頭が、1991 年頃から 90 年代中頃にかけて顕著になる[17]。そのような現象は、たしかに一部の極右勢力が生み出しているものであり、リベラル左派によるコンセンサスに支えられた社会の全体的な論調は当然のことながらそのような暴力的行為に対して、そして外国人を排斥するような考え方に対して、完全に批判的だった。ナチズムにつながるものを強く拒否する社会的に共有された意識、そしてそれとともに、ナチズムの過去をもつドイツとしての自己否定の意識は、その後も、21 世紀になって顕著になっていく転換にいたるまで、基本的には保たれ続けていく[18]。

とはいえ、多くの市民の意識としては、いつまでもナチズムの過去を突きつけられることに対する嫌悪感も、ナチズムにつながるものの拒否というコンセンサスと同時に存在する[19]。はじめに言及した Pigor & Eichhorn のカバレットの舞台も、ドイツ人の自己否定や肩身の狭さの意識が 2000 年前後においても保たれ続けていることの例証であると同時に、むしろナチズムの過去と向き合わされ続けることに対する自虐的な諷刺の演出がこれほど受け入れられていることの例証でもある。そしてまた、舞台で笑いが共有されているこの状況は、のちに次第に顕著になっていく傾向からふりかえってとらえるならば、「ドイツ」というネイションの意識を公的な場で表明してもよいのだという感覚が、次第に解き放たれていく過程を示すものであるかもしれない。

「過去の克服」を掲げ、ナチズムにつながるものへの共感や理解を決して許容しないリベラル左派の立場は、基本的には社会的コンセンサスであり続けていた。しかし同時に、保守派の「文化的ナショナリズム」もまた、さまざまなかたちで戦後ドイツのもう一方の知的潮流を形成し続けている[20]。ドイツにとっての忌まわしい過去を相対化しようとする議論は[21]、教育やその他の公共の議論においてリベラル左派のコンセンサスが支配的であったとしても、多くのドイツ人の意識のなかで共感を得ていた。そのような過程の中で、「ドイツ」を必ずしも否定しなくてもよい、ネイションの意識をおだやかなかたちで表現することもある程度許容されるという感覚が、次第にかたちをとって現れていくようになったのはいつ頃のことなのか。このような流れは統一の前から（とりわけ歴史家論争）、そしてとりわけ統一後におもに知識人の議論の中でさまざまなかたちをとって現れてはいたとしても、市民の生活意識レベルでの広範な社会的変化を生み出していたわけではない。

その転換点としてしばしば言及されるのは、2006 年にドイツで開催されたサッカーワー

ルドカップであるが、政治的な領域ではそれ以前に、民族主義的ナショナリズム、人種主義、反 EU を掲げる極右政党のドイツ国家民主党（NPD）が 2004 年以降、地方議会で議席を獲得するという事態も生じていた。2013 年には同じく極右政党として一般に位置づけられ、その後（2017 年）連邦議会でも議席を獲得し第 3 党にもなる「ドイツのための選択肢（AfD）」が設立される。さらに翌 2014 年には「西洋のイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」（PEGIDA）がドレスデンを中心に活動を開始する。そういったなかでドイツのあらたなナショナリズムに拍車をかけることになるのが、2015/16 年の難民危機である。ここではいくつかの主要なできごとを列挙しただけだが、これからとりあげる「ドイツ的とは何か」を掲げるいくつもの著作・刊行物は、まさにこのような時代の流れの中で集中的に生み出されたものである。

4. 明確な保守派・右派の言説

21 世紀になって次々と出版されていった『ドイツ的とは何か』という書名の刊行物をおおまかにでも分類しようとするのは、みかけほど単純ではない。以下、内容や執筆者の経歴や立場が完全に入り混じったリストとなるが、表題の一致という観点からのみ、まずはそれらの書物を出版年順に列挙してみよう。

(1) Rudolf Rahlves, *Was ist Deutsch? Charakter – Geist; Probleme*, Grabert:Tübingen, 2000.
(2) Friedrich Dieckmann, *Was ist deutsch? Eine Nationalerkundung, Suhrkamp*, 2003.
(3) Hans-Dieter Gelfert, *Was ist deutsch? Wie die Deutschen wurden, was sie sind*, C.H.Beck, 2005.
(4) Thomas Brehm, Matthias Hamann (Hrsg.), *Was ist deutsch? Fragen zum Selbstverständnis einer grübelnden Nation*, Germanisches Nationalmuseum Abt. Verlag, 1.Juni 2006.
(5) Günter Seubold (Hrsg.), *Was ist deutsch? Zehn klassische Antworten auf eine prekäre Frage*, DenkMal Verlag Bonn, 2013.
(6) Utz Maas, *Was ist deutsch? Die Entwicklung der sprachlichen Verhältnisse in Deutschland*, W. Fink, 2014 (UTB).
(7) Günther Dahlhoff, *Wer oder was ist deutsch? Die unbeantwortete Frage. Ein Essay*, Tectum, 2015.
(8) Jagoda Marinić, *Made in Germany: Was ist deutsch in Deutschland?* Hoffmann und Campe, 2016.
(9) Peter Trawny, *Was ist deutsch? Adornos verratenes Vermächtnis*, Matthes & Seitz Berlin, 2016.
(10) Dieter Borchmeyer, *Was ist deutsch? Die Suche einer Nation nach sich selbst*, Rohwolt Berlin, 2017 (Neuausgabe 2024).
(11) Pierre Sens, *Was ist deutsch? Wer gehört zu den Deutschen?* Verlag Goldene Rakete, 17.01.2018.
(12) *ZEIT Geschichte „Was ist deutsch? Die Erfindung der Nation: Mythen, Sagen, Märchen von 1800 bis heute*“ Ausgabe 5/2018.
(13) Joachim Bruhn, *Was deutsch ist. Zur kritischen Theorie der Nation*, ça ira-Verlag, 2019
(14) Wolfgang Dvorak-Stocker (Hrsg.), *Was ist deutsch? Elemente unserer Identität*, ARES Verlag, 2021.

ここにあげた著作物は、大学の研究者による完全に学術的なアプローチによる研究書から、アカデミックな背景をもちつつも比較的自由に執筆されたもの、ジャーナリストによるさまざまな立場の見解、学術的背景をある程度もっているように見せながらも基本的には保守派の民族アイデンティティ表明となっているもの、そして個人が自身の信念に基づき自由に執筆したものまで、非常に多様な現れ方をしている。政治的にも、極右主義者から左派まで立場は大きく異なるが、全般的には保守的な立場から生み出されたものが目立つ。

「ドイツとは何か」というタイトルの書物がこの時代に保守主義者・極右勢力の執筆者によって書かれるということは、もちろん容易に想像されることである。これらの書物のうち最も早い時点、2000年に刊行された著作(1)の著者ルドルフ・ラールフェス(1925-2010)は、極右政党NPD(2023年以降の政党名は「祖国(Die Heimat)」)の出版機関「ドイツの声(Deutsche Stimme)」からも出版活動を行なっているが[22]、この著作の出版社Grabert Verlagもまた極右の立場を明確にとることで知られている。ここではその内容の詳細に立ち入ることはしないが、重要なのはこの著作をはじめとする右派の出版物に限らず、「ドイツ的とは何か」を表題とする本がどのような目的から、なぜこのタイミングで書かれているかということである。ラールフェスの著作の第一章では、「典型的にドイツ的」という言葉が、他の国で自国の典型的特質について言及される場合とは対照的に、ドイツでは「誹謗、批難、軽蔑的」意味合いをもつということから話をはじめ、「ドイツ人の愛国心の欠如」の伝統が歴史的な言説やできごとを引き合いに出しながら語られてゆく[23]。そして、「愛国心」の価値が強調されてゆく。「愛国心は、生来備わっているもの、自らの文化、自らの魂を保持するための武具装備である。それはあるネイションの防御兵器なのだ。」[24]語られる内容だけでなく、使われる言葉そのものが明確に伝統的なドイツ的価値としてかつてイメージされていたものに近づいているが、そこではDeutschtumという語も当たり前のように使われている。こういった言説そのものは、極右の立場としては、想像されるとおりの方向性をもつものではあるが、この著作を2000年という時点で刊行する理由については、とくに何もふれられていない。

アカデミックな経歴はある程度あるとしても、大学の研究者や批判的距離をもつジャーナリストではない右派の執筆者による著作としては、一つのカテゴリーに含めるのをためらうほど大きく異なる点があるが、(1)の他にも(7)(11)(14)をあげることができる。これらはいずれも2015年以降に出版されている。(11)ピエール・サンスの著作『ドイツ的とは何か?　ドイツ人に属するのは誰か?』が「愛国主義」を明確に標榜し、オンデマンド出版で出されたものであるのに対して、(7)『ドイツ的であるのは誰/何か――答えられていない問い』の著者ギュンター・ダールホフは、外交官としての経歴をもち、アデナウアー首相についての著作も、学術出版を主に手がける同じTectum出版社から刊行している。ダールホフの著作は、ドイツの歴史や著作(文学・思想)に依拠しつつ、「ドイツ性(Deutschtum)」をドイツがたどった歴史的な段階にしたがいながら浮き上がらせていくことを目指すものとなっている。表向き「愛国主義」という言葉そのものが現れることはないとしても、繰り返し当然のように用いられているDeutschtumという言葉ひとつをもってしても、保守主義者による「ドイツ的」なものの再構成の意図がそこには明確に表れて

いる。しかし、著者がなぜこの時点でこの著作を刊行したのかはここでも特に語られてはいない[25]。

いちばん新しいドヴォジャーク＝シュトッカー編による論集（14）『ドイツ的とは何か――われわれのアイデンティティの諸要素』は、外面的には研究者による論文集のようにも見え（副題の素朴さはともかくとして）、執筆者のうちには大学の研究者や博士の学位を取得している者（いずれもかなり高齢）も含まれてはいるが、全体としては「ドイツ的」ということをめぐるそれぞれのトピックについて比較的自由に書かれたものとなっている。この論集の出版社 Ares Verlag は、保守主義の立場を明確にとっているが、ここに含まれている個々の論考自体が、すでに Ares Verlag を系列会社として含むオーストリアの出版社 Leopold Stocker Verlag の発行する右派の雑誌『新秩序（Neue Ordnung）』（2020 年以降の雑誌名は『西欧（Abendland）』）で発表されていたものであった。編者ヴォルフガング・ドヴォジャーク＝シュトッカーは、「歴史家」という肩書きがここでは与えられているが、研究者ではなく出版社 Ares の運営・編集に携わる立場にある。彼自身がこの論集の「前書き」を執筆しているが、そこでもやはりドイツ人がドイツ人であることを「誇りに」思えない状況を出発点とし、自らの「アイデンティティ」を取り戻すために「ドイツ的とは何か」を問うという意図が語られている[26]。

5. ジャーナリスト、作家、研究者の視点

一般に社会的には専門的な知識人（大学の研究者、ジャーナリスト、広い意味での作家）による発信として見なされる著作物も、その方向性はそれぞれ大きく異なる。2003 年に Suhrkamp 社から刊行された（2）フリードリヒ・ディークマン『ドイツ的とは何か？――ネイションの探索』は、この問いに対して批判的距離をとりながら対峙している最も早い時期の著作である。著者は、旧東ドイツにあたる地域で生まれ育ち、ライプツィヒ大学で学んだあと、1963 年以降執筆活動に携わり、1976 年からは（ブレヒトの研究者としても）ベルリナー・アンサンブルのドラマトゥルクを務めている。一冊の書物（edition suhrkamp シリーズの文庫本）として出版されたこの著作は、「Ⅰ 黄昏のうちにある国」、「Ⅱ 天候概況」〔政治的な意味での〕、「Ⅲ キーワード」と題される三部から構成され、それぞれ、批評活動を精力的に行うディークマンが 1997 年から 2000 年にかけて新聞・雑誌・冊子等に発表した文章を再録したものである。著者は、統一後 10 年を迎えようとする時点でのドイツの社会的思潮を、経歴から自ずと知れるように、左派の視点から鋭く、批判的に、そして軽妙に描き出してゆく。冒頭に掲げられた「ドイツ的とは何か？」という書物と同名のエッセイでは、とりわけドイツ人の特質について語るカントの言説をとりあげ、「ドイツ的」なものをめぐる言説を歴史的なコンテクストから見渡してゆくが、その出発点ではやはりドイツ人の自己批判・卑下・憎悪という周知の前提にやはり言及することになる[27]。これら一連のエッセイ、そしてそれがまとめられた書物がなぜ生まれることになったのかということについては、前書きの冒頭で、「ドイツ放送（Deutschlandfunk）」が、60 年代に行われたこの問いを扱うシリーズ放送を思い描いて、著者その他の人たちにそのきっかけ

を与えたからだと説明されている[28]。そのような外的事情があったにせよ、そもそもこの時点でこの問いがドイツにとってアクチュアルな問いであったと放送局には意識されていたということであり、そしてまた著者自身にとっても、これだけの関連するエッセイを書くような流れが存在していたということはいえるだろう。

そのような社会的関心ということでいえば、「ゲルマン国立博物館（Germanisches Nationalmuseum）」において2006年に開催された特別展「ドイツ的とは何か？」（2006年6月2日–10月3日）とそのカタログ（4）も、21世紀におけるこの言説の流れの中で非常に興味深い位置にあるといえる。この特別展は、同じ年にドイツで開催されたサッカーワールドカップとリンクするものとして企画されていたが[29]、それと同時に、ドイツのネイションの問題そのものに焦点を当てようとするこの展示が、まさにこの博物館で企画されたということも特別な意味をもつと言えるだろう。日本語では一般に「国立博物館」と訳されるこの博物館の名称は、英語でnational museumと呼ばれる「国立」の博物館を意味するものでは本来ない。この言葉は、19世紀中葉のナショナリズム的意識の中で確立していったドイツ学／ドイツ文学（Germanistik）の理念とのつながりを強固にもち、設立の由来としては文字通り「ネイション」の意識と強く結びついているからである。

この特別展が、2006年のサッカーワールドカップによるネイション意識や「愛国心」に対する抵抗の雪解けと結びついているとすれば、ニュルンベルクにある博物館という地理的条件をはるかに超えた広がりをもつ「ツァイト 歴史」（Zeit Geschichte）のシリーズ（『ツァイト（Die Zeit）』発行）で2018年5月に発行された（12）冊子『ドイツ的とは何か？　ネイションの発見：神話、伝説、メルヒェン――1800年から今日にいたるまで』は、まちがいなく2015/16年の「難民危機」の強力な余波を受けて企画されたものといえるだろう。

よりアカデミックな領域としては、2013年に出版された（5）『ドイツ的とは何か？――扱いにくい問いに対する10の古典的回答』も、アンソロジーではあるが、重要な位置を占めている。哲学の教授である編者ギュンター・ゾイボルトは、研究者としてこの問いに対して自ら論じるのではなく、副題が示唆するように、このテーマについて語る十人（タキトゥス、カント、シラー、フィヒテ、ヘーゲル、ヴァーグナー、ニーチェ、トーマス・マン、アルノルト・ゲーレン）のテクストを、「古典的回答」（およびそれぞれのテクストに対する編者の導入の文章）のアンソロジーとして提示している。2013年という時点でも、「ドイツ的とは何か」という問いが、「扱いにくい（危険な）prekär」ものとして意識されていることは、この編者による序文の書き出しからも明白に見てとることができる。この問いを口にするとすれば、この書物のように「古典的・歴史的立場に限定するとしても」、問いを立てる行為そのものに対する異議申し立てをあらかじめ想定しておかなければならない[30]。この問いを口にすること、このテーマを扱うことは、ドイツの忌まわしい歴史的過去、ナショナリズムの問題によって引き起こされる「誤解」に結びつきかねないということを意識しながらも[31]、この編者はなぜこの書物（古典的テクストのアンソロジー）を出版しようとしているのか。さしあたり編者は序文で次のように述べている。「今日の文化はその歴史的由来を抜きにして理解することはできない。同じように、この問いに対する本質的に歴史的な、そして歴史的波及力をもつ問い／問いの試みを知っておくことは、ドイツ的なものとは何かを今日の目で捉えるために大きな手助けとなるだろう。」[32] いささか素朴なこの位置づけ

が、なぜこの時点でアクチュアルなものとしてとらえられているのかについては、何も語られていない。しかし、2010 年代になって最初に現れたこの表題の書物は、その後立て続けに出版されることになる同名の刊行物の先陣を切るものとして、この時期のドイツの思潮を体現する現象となっていたといえるだろう。

「難民危機」の激動の時期にあたる 2016 年に出版された二つの著作のうち、クロアチア出身のドイツ人作家であり、ベルリンの『ターゲスツァイトゥング』紙の執筆者でもあるヤゴダ・マリニッチの (8)『メイド・イン・ジャーマニー　ドイツにおいてドイツ的とは何か？』は、自ら移民としてドイツで暮らすようになった作家が、移民・難民をめぐって激しい議論が交わされていた時期に出版されたエッセイ集である。収録されているエッセイは、2012 年から 2014 年にかけて行われた講演をもとにしているが、本の冒頭でとりあげられている、「難民危機」に対処するメルケル首相の政策への批判では、2015 年から 16 年にかけての状況（そこには 2015 年ケルンでのアラブ人・北アフリカ人等による大晦日集団性暴行・強盗事件も含まれている）に焦点が当てられており、2016 年の時点でのドイツ社会の状況に直面しながら発信されている著作であることは明らかである。副題に示されている「ドイツにおいてドイツ的とは何か？」をタイトルとするエッセイ（講演）も含まれているが、このエッセイではこの時代における「多様性」へと議論の方向を向けるものであり、「ドイツ的」なものをめぐる言説の歴史とは、少なくとも直接のつながりはない。

それに対してもう一つの (9) ペーター・トラウニー『ドイツ的とは何か？　アドルノの見捨てられた遺産』は、このような議論のさなか直接的に社会的問題と対決するのではなく、アドルノの『批判的モデル集 II』のうちに含まれるテクスト「ドイツ的とは何かという問いに対して」[33] を足がかりとして、この文章が書かれた 1965 年のほぼ 50 年後にあたる 2016 年にこの問いにあらたに取り組もうとしている。多数の著作を出版しているこの哲学者・大学教員は、もちろんアクチュアルな問題を強く意識している。「アドルノがこの問いに答えてたっぷり半世紀たつ今日、この問いがあらたに立てられることになる。〔…〕もちろん、今日では別の問題、つまり単にヨーロッパが直面しているだけではない移民の動きのことがある、そしてまた不安定な未来のために生じ、そのような移民の動きと結びついたさまざまな不安なことがらのことがある。「ドイツ的とは何か？」――そのように問わざるをえなくなっているのだ。なぜならドイツ人は自分の国において、どうやらドイツ人ではない人たち、もしかするとドイツ人になろうなどと思っていないような人たち、ますます増えていくそのような人たちと関わっていかなければならないのだから。」[34] トラウニーは瞑想的ともいえる語り口で、アドルノ、トーマス・マン、ハーバーマス、そして『ドイツの廃止――われわれはいかに自分の国を危険にさらしているか』[35] という著作を 2016 年に出版したティロ・ザラツィンについて語ってゆく。そのような迂回とも見えるアプローチによって、まさにこの時代のアクチュアルな問いに対して間接的に答えようとしていたということになるだろう。

明確に左派の経歴をもつジャーナリスト、ヨアヒム・ブルーンの著作 (13)『ドイツ的とは何か――ネイションの批判的理論』の初版が出版されたのは 1994 年であり（ここでは補筆修正がなされた 2019 年の第二版をとりあげている）、統一後のネイションをめぐる議論の延長上に位置づけることができる。出版社の ça ira-Verlag は、「反ドイツ」（「ドイツ」という

ネイションの否定）を掲げ、フランクフルト学派の批判理論に依拠する。このような議論の方向も、統一後から 21 世紀にかけての「ドイツ的とは何か」という言説の流れの中での一方の極を形成するものとなっていることが見てとれるだろう。

6. ディーター・ボルヒマイアー『ドイツ的とは何か？』

大学の研究者による出版物の中でも、1000 ページを超える圧倒的な分量をもつディーター・ボルヒマイアーの（10）『ドイツ的とは何か？　あるネイションによる自らの模索』（2017 年）は、この問いをめぐる言説の歴史に対し思想史的に取り組もうとする者にとって、欠かすことのできない特別な重要性をもつ文献である。ボルヒマイアーは、ハイデルベルク大学のドイツ文学の教授であり [36]、ゲーテやシラーを中心とするヴァイマール古典派、モーツァルト、ヴァーグナー、ニーチェ、トーマス・マンについての数多くの重要な著作により、ドイツにおける傑出したドイツ文学研究者の一人と見なされている。

12 章からなるこの著作は、いくつかの重要なトピック（例えば、「ドイツ古典派」、「ドイツ性とユダヤ性」、「ドイツの大学とドイツの哲学」、「ドイツ音楽」）を掲げながらも、全体としてはゆるやかに、つまり時系列的ではなく、「ドイツ的なもの（das Deutsche）」とネイションとしてのアイデンティティをめぐる言説の歴史を幅広いパースペクティブでたどってゆく。ここで語られるゆるやかな歴史の範囲は、最終章で「統一以降のドイツ人」について少しばかり触れられてはいるが（26 ページの最終章は分量的には本文全体の 3 パーセントにも満たない）、基本的には 18 世紀末から第二次世界大戦の直後（トーマス・マンの講演）のあいだ、さらにいえば、ほぼ 19 世紀から 20 世紀初頭に限られているといってよい。そのような歴史的な広がりの中でこの主題が語られるのは、ドイツ人のナショナリズム的な意識の誕生と肥大化のなかで積み重ねられてゆく言説が、まさにその時代のなかで生み出されていったものである以上、当然のことでもある。しかし、この圧倒的な分量の書物の中で語られる「ドイツ的」なものをめぐる知の歴史は、21 世紀のこの時点において、どのような意味をもつものとして語られているのか、どのような位置を占めるものとして書かれているのか、という疑問が当然のように生じる。

「ドイツ人の二つの魂」という表題が掲げられた「序文」は、「ドイツ人ほどたゆむことなく自らのアイデンティティと取り組んできた民族は歴史上ほかにはない」という言葉で始まる。そして、「とりわけ 18 世紀以来何度もあらたに立てられてきた「ドイツ的とは何か」という問いに対する答え」が――トーマス・マンが講演『ドイツとドイツ人』でまさにそのように要約しているように――「コスモポリタン的なもの」と「ナショナリズム的なもの」という両極のあいだを揺れ動いてきたという位置づけの中で、ナチズムが前者を排除し、完全にナショナリズム的な捉え方をして破局にいたったがゆえに、ドイツ的アイデンティティを問うことそのものが、長いあいだ規範として禁じられることにもなったという歴史的状況にも言及している。「再統一のあとようやく、この問いはこういった規範から解放されることになったのだ。」[37]

この言葉に続いて、著者はすぐさま、「禁止」という規範から解放された問いの歴史的

潮流のうちに入り込んでゆく。そして、執筆時点での同時代のアクチュアルな問題には、およそ 900 ページにわたる言説の系譜をたどる道のりのあとようやく 30 ページに満たない最終章にいたるまでのあいだ、再び立ち戻ることはほぼない。最終章は、「ドイツ統一とアイデンティティ危機」、「統一後の論争」、「ドイツ人はまだどれほどドイツ的か？」、そして「ヨーロッパの新たな中心としてのドイツ」という見出しが与えられた四つの部分からなる。そして、この長大な書物の締めくくりは、ドイツが経済的な領域においてヨーロッパの中で支配的な力をもつとしても、「文化」の領域、外に向かっての「文化政策」こそが、平和の力をもつものとして重要なものとなるということを強調する。「ドイツは、その最上の時代にそうであったように、ふたたび、〈文化の国〉となることもできるのだ。」[38] そしてそのあと、序章の終わりの部分でも言及されていた「ナウムブルクのウタ」の彫像のイメージで著作全体が締めくくられる[39]。ナウムブルク大聖堂の内部にあるゴシック芸術の傑作、ウタ・フォン・バレンシュテットの彫像は、19 世紀から 20 世紀にかけてドイツ的特質を体現する象徴のようにとらえられ、そのためにナチスの言説の中でも言及されていた。そのようなナチズムの側からの言及による負のイメージはこの間ある程度払拭されたとしても、この彫像が「ドイツ的」なものの象徴となってきた伝統はまちがいなく保たれ続けている[40]。

ナウムブルク大聖堂のウタ・フォン・バレンシュテットの彫像
(https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Naumburg-Uta.JPG)

2024 年 9 月 18 日にミュンヘンでディーター・ボルヒマイアー氏と行った対談の中で、筆者は、(1) 同氏の著作『ドイツ的とは何か？』は、戦後のドイツにおいてドイツ的特質を問うことがながらくタブーとされてきたこととどのように関わっているか、そして (2) 今世紀になって「ドイツ的とは何か」という同じタイトルの書籍が多数出版されるという興味深い現象が生じており、そこにはある社会的思潮の転換が認められると考えられるが、あなたがこの著作をまさに 2017 年という時点で出版することになったきっかけは何か、という二つの質問をまず投げかけた。筆者はすぐに続けて、ボルヒマイアー氏はこれまでゲーテ、シラー、ヴァーグナー、トーマス・マンについての数多くの著作を発表しており、『ドイツ的とは何か？』という著作は、これまで同氏が積み上げてきた仕事全体の総括であるように見える、しかし他方で、同時代の興味深い現象とも関わっているように見えるということも事実であると付言した。それに対してボルヒマイアー氏は、筆者が指摘したように、この著作はそれまでの研究全体の総括であり、それまで執筆していたゲーテ、ヴァーグナー、トーマス・マンについての著作は、すべて「ドイツ的とは何か」という問いと関わっていると述べるとともに、この著作のベースとなるものは、2010 年頃にはほぼかたちをとっており、2017 年に出版されたことに特別な意図はなく偶然だという答えだった（ちなみにこの年が「難民危機」の直後に当たることも、指摘されるまでとくに意識していなかったようだ）。それでは、あなたはこの著作をドイツ再統一の前であっても書くことはできたでしょうかと問いかけると、一瞬考えて「いい質問だ」とコメントしたのち、自分は書くことができたと思うと答えた。研究の対象としてのドイツ的なもの自体は変わらないからと。

たしかに政治的な「ドイツ性（Deutschtum）」の議論はあったが（ナチズムにつながってゆくドイツ的本質をめぐる言説と戦後のその否定）、ドイツ人のコスモポリタニズムという側面もあったのだということを、私の問いかけに対してボルヒマイアー氏はむしろ強調し、この著作の中でのドイツ的なものへの問いが、政治的連関のためにネガティブな議論の方向に転じてしまうことを避けていたのかもしれない。

「ドイツ的とは何か」を表題とする多数の本が出版されているという同時代の現象については、意識していなかったのかと重ねて尋ねると、意識していなかったという答えだった。しかし、参考文献では、ボルヒマイアー氏の著作の前に出版されているもののうち、4 点（(2)Friedrich Dieckmann, (3) Hans-Dieter Gelfert, (4)Thomas Brehm, Matthias Hamann (Hrsg.), (5) Günter Seubold (Hrsg.)）が挙げられている。ボルヒマイアー氏のように広い意味での 19 世紀を中心とした作家・思想家・芸術家の言説の歴史を丹念にたどる作業を行なっているのは、実際、この著作のみであり、その意味では他に意識すべき書物はなかったというのはその通りであるのかもしれない。だが、たとえそのように意識されていなかったとしても、それまでのボルヒマイアー氏の仕事の総括に対して、「ドイツ的とは何か」というタイトルが与えられることになったとすれば、そこにはこのタイトルへと収束してゆくような大きな力のうちに、この著作もやはり結果的に巻き込まれていたことになる。いかに短いものであるとしても、終章では現代的なコンテクストにこの主題が流れ込んでゆくということがやはり提示されているのだから。

＊　＊　＊

ほぼ同じタイトルをもつこれらの著作の多くは、容易に予想されることではあるが、一方では、保守主義者の文化的ナショナリズム、さらには極右的な「愛国主義」の言説を提示する場になるとともに、他方では、リベラル左派の（あるいはさらに左派の）言説の流れを引き継ぐものとなっている。つまり、同じ「ドイツ的とは何か」という言葉のもとに、戦後ドイツの（おもに 70 年代以降の）両極的な知的潮流が姿を現していることになる。特徴的であるのは、これらの両極的な方向性をもつ言説が、ともに「ドイツ的とは何か」という問いを掲げて生み出されているということであり、また、これらの言説が、とりわけリベラル左派のコンセンサスによって公的にはかなりの程度封じられていた保守派の言説が、21 世紀になってこのように解き放たれたように見えるということである。「ドイツ的とは何か」という問いによって期待される回答の内容がすぐさまナショナリズム的特質に結びつくとともに、すでに述べたように、「ドイツ的とは何か」という問いを発すること自体が「ドイツ的」特質であるとみなされてきたことを考えるならば、この問いが、まず保守派の側の言説に関わるものであることは自明である。左派の著作があえてこの問いを掲げているのは、戦略的に敵対者の言葉を逆手に取りつつも、その問いに新たな意味とコンテクストを与えるためだといえるだろう。「ドイツ的とは何か」という問いは、単にナショナリズム的言説をなんらかのかたちで引き出すことになる一つの問いであるというだけではない。ナショナリズム的言説の歴史的総体そのものを体現することになる核心的な問いなのである。その問いが、21 世紀になって、とりわけ 2015/16 年以降、再び解き放たれる

ことになったという現象のもつ意味は大きい。

註

＊ 本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C）「ドイツ翻訳思想史とドイツ思想史におけるナショナリズム的特質との関係をめぐる研究」）による支援を受けた成果である。

1 Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften Band 10-2, Kulturkritik und Gesellschaft II*, Suhrkamp, 1997, p. 691. (Auf die Frage: Was ist deutsch, in: *Stichworte. Kritische Modelle 2*.)（Th.W. アドルノ『批判的モデル集 II ――見出し語――』大久保健治訳、法政大学出版局、1971 年、134 頁。）
2 それらの著作物の文献情報はのちに本文で列挙するため、ここでは省略する。
3 ドイツ語の歌詞は以下のサイトを参照した。
https://www.pigor.de/songs-a-z/song/dont-look (アクセス日：2024/9/27)
4 このカバレットの舞台は、YouTube でも見ることができ、まさにこの alliiert という言葉が観客の笑いを誘っていることがわかる。https://www.youtube.com/watch?v=2iNbuSyKbdU (アクセス日：2024/10/11)
5 Heinz Schlaffer, *Die kurze Geschichte der deutschen Literatur.* München: Carl Hanser, 2002. (Lizenzausgabe: Köln: Anaconda, 2013.)（ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』和泉雅人・安川晴基訳、同学社、2008 年）筆者はこの著作について、山口裕之「負の烙印の始まりについて――「ドイツ的」なものの意識形成と翻訳理論研究」『総合文化研究』vol.25 (2021)、東京外国語大学総合文化研究所、p. 69-71 でも言及している。
6 例えば、Dieter Borchmeyer (のちに取り上げる *Was ist deutsch? — Die Suche einer Nation nach sich selbst.* Rowohlt, Berlin 2017 の著者) は、2024 年 9 月 18 日に行われた筆者との対話の中で、シュラッファーの著作の主張そのものを強く批判するとともに、この著作の冒頭で述べられているドイツ文学を学ぶドイツ人学生による「ドイツ的」なものの否定という傾向についても否定している。
7 これらの概念の整理については、とりわけ Otto Dan, *Nation und Nationalismus in Deutschland 1770-1990*, C.H.Beck,1993. 参照。ただし、本稿での「ナショナリズム」という言葉は、この著作でのオットー・ダンの定義よりも広いものとして使っている。
8 Borchmeyer, *Was ist deutsch?*, p. 34; Günter Seubold (Hrsg), *Was ist deutsch? Zehn klassische Antworten auf eine prekäre Frage*, DenkMal Verlag Bonn, 2013, p. 7 をはじめとして、自国民（民族）の特質を問う問いそのものが、まさにドイツに特有のものであるという指摘は、「ドイツ的とは何か」という議論の場でしばしば言及される。
9 ボルヒマイアーやゾイボルト（編）の著作・アンソロジーではとくに顕著にそのような描き方が見られる。
10 Alfred Rosenberg, *Der Mythus des 20. Jahrhunderts. Eine Wertung der seelisch-geistigen Gestaltenkämpfe unserer Zeit*. 33.-34. Auflage, Hoheneichen Verlag, München, 1934. この PDF 版により語数をカウント。
11 ローゼンベルク『二十世紀の神話』では、Deutschtum という語は 14 回使われている。Wesen という語とくらべれば、特別に使用頻度が高いというわけではないように見えるかもしれないが、これだけの回数で当たり前のようにこの言葉が用いられているということは特徴的なことがらといえる。（註 10 参照）
12 三島憲一『戦後ドイツ――その知的歴史』岩波新書、1991 年、三島憲一『現代ドイツ――統一後の知的軌跡――』岩波新書、2006 年、ハーバーマス／ノルテ他『過ぎ去ろうとしない過去』人文書院、1995 年、241-257 頁（三島憲一「解説――ドイツ歴史家論争の背景」）参照。
13 ハーバーマス／ノルテ他『過ぎ去ろうとしない過去――ナチズムとドイツ歴史家論争』219 頁。
14 ハーバーマス／ノルテ他『過ぎ去ろうとしない過去』250 頁。（三島憲一「解説――ドイツ歴史家論争の背景」）
15 三島憲一『現代ドイツ』100 頁。
16 三島憲一は、ドイツの国民国家は、普遍主義的なデモクラシーに根ざす「西欧型」ではなく、エスニックな「民族」という概念が軸となる「中欧型・東欧型」のタイプに属し、「エトノスに重点を置いた国家」であることを強調している。三島憲一『現代ドイツ』20-25 頁参照。
17 これについては数多くのところで語られているが、ドイツの現場に密接したレポートとしてとくに、山本知佳子『外国人襲撃と統一ドイツ』岩波ブックレット No.324、1993 年参照。
18 とはいえ、統一後の「ネイション」をめぐる意識は、リベラル左派のコンセンサスにおさまらない振れを社会の中に内包している。壁の開放以降、統一に反対していた過激な左派勢力は、“Nie wieder Deutschland”（ドイツを決して繰り返さない！）というスローガンを掲げて、ネオナチはもちろんのこと、ドイツ・ナショナリズムや人種主義的な思考の復活に反対を表明している。他方で、極右勢力もまた 1990 年代の社会の中ですでに影響力を与え始めている（高橋秀寿『再帰化する近代――ドイツ現代史試論』国際書院、1997 年、61-65 頁）。

19　1998 年にマルティン・ヴァルザーがドイツ書籍協会平和賞の授賞式でおこなった演説はその端的な表れであり、三島憲一『現代ドイツ』(186 頁以下) は、このような思想状況を明確に浮き上がらせている。
20　三島憲一『文化とレイシズム――統一ドイツの知的風土』岩波書店、1996 年、とりわけ 177-202 頁参照。
21　三島憲一は、「保守派による過去の問題の相対化」の手段を、1. 問題をずらすことと 2. 加害者と犠牲者を混同させ、強制的和解を試みることにわけ、前者についてさらに (1) 戦後の再建の輝かしさを誇る「自信回復療法」、(2) 歴史的相対化による責任逃れの論法、(3)「歴史哲学的運命論化」（左派への揶揄）、(4) 過去の偉大な伝統への帰属感による「代償探求」という点から説明している。三島憲一『文化とレイシズム』2-4 頁。
22　オンライン上の「ヴェストファーレン作家辞典 (Lexikon Westfälischer Autorinnen und Autoren)」(https://www.lexikon-westfaelischer-autorinnen-und-autoren.de/) での作家情報に基づく。
https://www.lexikon-westfaelischer-autorinnen-und-autoren.de/autoren/rahlves-rudolf/（閲覧日：2024/10/23）
23　Rahlves, pp. 12-14.
24　Rahlves, pp. 21-22.
25　本の裏表紙には、「〈ドイツ的であるのは誰／何か〉という問いは、現在の「難民危機」によってふたたび熱い議論の中心に躍り出ることになった」とあるが、これは出版の時点での編集者側の言葉であると推測される。
26　Dvorak-Stocker, pp. 11-16.
27　Dieckmann, pp. 15-16.
28　Dieckmann, p. 7.
29　Cf: ゲルマン国立博物館のオンラインサイト
https://www.gnm.de/ausstellungen/sonderausstellungen-rueckblick/was-ist-deutsch
30　Seubold, p. 13.
31　Seubold, p. 15.
32　Seubold, p. 15.
33　Adorno, *Gesammelte Schriften Band 10-2*, pp. 691-701.（アドルノ『批判的モデル集 II』134-148 頁。）
34　Trawny, p. 12.
35　Thilo Sarrazin, *Deutschland schafft sich ab. Wie wir unser Land aufs Spiel setzen.* Deutsche Verlags-Anstalt: München, 7/2016, I.
36　ハイデルベルク大学には 1988 年に就任しているが、定年後に名誉教授 (Professor emeritus) となってからもハイデルベルク大学で教育活動を行っている（2024 年現在）。
37　以上、Borchmeyer, p. 13.
38　Borchmeyer, p. 933.
39　Borchmeyer, pp. 30-31, 933.
40　右派の編者・論者・出版社による (14)Wolfgang Dvorak-Stocker (Hrsg.), *Was ist deutsch? Elemente unserer Identität*（『ドイツ的とは何か？　われわれのアイデンティティの諸要素』）は、表紙にこの彫像の写真を掲げ、またこの論集に含まれる論考「ドイツ芸術における「ドイツ的」なもの」でも、同じ写真が掲載されている（p. 63）。

“What Is Germanness?” — Reflections on a Contemporaneous Phenomenon

Hiroyuki YAMAGUCHI

Summary

An interesting phenomenon has been observed since the beginning of the 21st century: as many as 14 works with the (almost) identical title “What is Germanness?” have been published one after another. Moreover, more than half of them are concentrated in the period after 2015, when the “refugee crisis” became a social issue. After the Second World War, and especially since the 1970s, a left-liberal consensus has developed in Germany in which anything connected with Nazism is thoroughly rejected. This led to widespread self-denial of Germany within German society, whereby it has become almost taboo to refer to ‘Germanness’ as a collective national characteristic. This publishing phenomenon indicates a certain change in social understanding. By examining the authors, publishers, content, and the purposes behind the writing of the respective books published under the title “What is Germanness?”, this article establishes that these publications have, on the one hand, become, as can easily be imagined, a platform for the presentation of conservative cultural nationalism and even far-right “patriotic” discourses, and on the other hand, have been provoked by the development of debate on the liberal left. A social shift can be recognized here, in which conservative discourses, which were rarely brought to the surface by the post-war liberal-left consensus, have to some extent been unleashed.

キーワード
ドイツ　ドイツ的　ドイツ性　ナショナリズム　ナチズム

Keywords
Germany　Germanness　Nationalism　Nazism